令和６年度　日本大学三島高等学校・中学校　自己評価票

〔本校の目指す学校像〕

本校の教育方針・目標に基づき，地域社会に根ざす伝統校として，知・徳・体のバランスを重視した人間性を育むとともに，21 世紀型教育（グローバル・ＩＣＴ・キャリア教育・アクティブラーニング等）を推進し，日本大学のスケールメリットを生かした教育に積極的に取り組む。そして 21 世紀のグローバル社会に通用する力を身につけ，自らの力で道をひらき，希望をかなえる生徒を育成する。

１　校訓

自由と規律

２　教育方針

本校は「日本大学の目的および使命」に基づき，豊かな自然環境と恵まれた教育環境の中で，教育理念である「自主創造」の精神を育み，世界の進展に適応し，「自由と規律」を重んじ，世界の平和と人類の福祉に貢献する人間を育成することを教育の方針とする。

３　教育目標

①　自主協同の精神を養い，心身ともに健康な人間を育成する。

②　広く世界の文化を学び，文化的創造力溢れる人間を育成する。

③　豊かな教養を身に付け，真理と平和を愛する人間を育成する。

４　スクール・ミッション

社会のさまざまな分野でリーダーシップを発揮できる人材を育成する

①　向上心を育み，自ら学ぶ習慣を身につけ，時代を担う人材として必要となる学力をつけます。

②　広く正解や文化を学び．豊かな心身を育み．豊富な知識や多様な価値観を身につけ，自ら考え行動する力をつけます。

③　自分の将来の生き方や社会への関心を深め．人生を描き，をひらく力を身につけます。

〔本校の特徴〕

本校は，日本大学付属校として 1958 年に創設し，三島の地に定着して 60 余年が経った。2003 年には中学校を創設し，現在，日本大学国際関係学部の併設校として，日本大学の研究及び教育の実績を本校の教育活動の基盤としカリキュラムの充実を図っている。また，日本大学への進学を中心に常に大学進学率 90%以上を誇る安定した大学進学実績は地域の人たちから高い評価や支持を得ている。大学キャンパスの中に位置し広く落ち着いた教育環境に加え，施設の全てにおいて耐震化が完了していることで，安心安全で充実した教育活動を展開することができている。

〔令和６年度の重点目標〕

永続的な学校経営体制を構築する～魅力ある学校づくりと適正化～

令和５年度に引き続き，以下の４項目を重点目標と定め，学校運営に当たることとする。

1　コース制への完全移行に伴うカリキュラム改善とキャリア教育の充実（学習指導＝教育活動）

2　日常生活における生徒指導の在り方の見直し及び改善（生徒指導＝学校生活への配慮）

3　一人一人の目標に合わせた進路指導の実践と進学実績づくり（進路指導）

4　令和７年度入学定員の確保を目標とした入試広報活動の改善（広報・管理運営）

〔令和６年度の自己点検・評価結果〕

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
教育活動	**新学習指導要領を踏まえた上での授業・評価の改善**	新学習指導要領に沿ったカリキュラムに移行して３年目を迎えたが，各教科とも指導内容を試行錯誤している状態である。 評価法についても，各教科における評価項目である規準の設定に試行錯誤したている。 総合的な探究の時間に対しては，実践的な取組を各コースとも行っており，特色が出てきている。	B	各教科の科目グループにおいて，指導内容に対する指導方法を検討する。 評価法についても，規準の設定を検討することで，より妥当性の高い評価ができるよう検証を継続する。 総合的な探究の時間で実践してきた内容を検討し直し，よりキャリア形成につながる内容へと改善を図る。
	生徒による授業評価アンケート結果に基づく授業改善	授業評価アンケートの回答は，おおむね平均値 3.50 を超えているため，生徒にとって，十分な授業が展開できていた。 しかし，対話的な学びに関しては，平均値が 3.37 と他項目に比べて低くなっていた。 ＩＣＴを活用した授業改善に向けた教員研修を実施した。	B	授業評価結果を受けて，各教員が授業改善に向け，課題を持って取り組んでいけるような話合いの場を設ける。 対話的な学びに対して，授業内でいかに生徒の発言する機会を設けることができるかを検討する。 ＩＣＴを積極的に活用した授業を実践するための研修会等を開催する。
	高大接続改革への対応	希望者に対して国際関係学部の一般教養課程の授業履修の機会を設けた。 コースごとに特色を出せるように大学への興味関心を高める取組を実践した。 例）総合進学Ｃ：生産工学部連携モビリティプロジェクト，アスリートＣ：スポーツ科学部での体験授業，アカデミックＣ：大学先端研究講座など	B	引き続き国際関係学部との連携により，授業履修を継続する。 令和７年度は，より連携を強めてゼミへの参加機会を設ける（予定）。 各コースが総合的な探究の時間を起点として，大学と連携できるような機会を設けることを検討していく。
	スクール・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針，教育課程の編成及び実施に関す	コース制への移行に伴い，スクール・ポリシーを策定する前に，スクール・ミッションを公表した。リーダー育成を主眼として，コ	B	策定されたスクール・ポリシーについて，適切に公表を行っていく。

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
	る方針及び入学者の受け入れに関する方針）の策定及び公表	ース制移行完成年度を迎えた各コースの実情に合わせたスクール・ポリシーを策定し，公表した。		
学校生活への配慮	いじめ防止のための取組	いじめの訴えや報告が入ったところで，事実確認に漏れがないよう「５W，１H」の事実確認を行った。 多くの関係者で内容を把握できるよう情報共有をした。 その上でいじめ対策委員会に諮り，被害者の家庭へ報告をし，不具合が起きない進行に努めた。	A	引き続き丁寧な対応を心掛け，いじめを見逃さないように組織的な対応を強化する。 いじめ対策基本方針の見直しを図る。 学期に１回の「学校生活に関するアンケート」を実施するなど，いじめに限らず，生徒の異変を見逃さないように心掛ける。
	遅刻者数減少に向けた取組	公共委員主体の遅刻者減少に向けて，「遅刻者撲滅運動」を実施した。 公共委員会の提案により，「遅刻者撲滅運動」の実施回数を月に１回から 10 日に１回と回数を増やし，遅刻者数の減少に努めた。	A	遅刻者数減少に向け，以下に取り組む。 ４月（１学期）：校則・学校生活のルール等の確認 ２学期：校則・学校生活のルールの遵守指導
	主体性の育成に向けた取組	生徒会執行部の生徒が働き掛け，各委員会の活性化を図った。 週番活動の活性化のために，各委員会の委員長への事前連絡を徹底するなど，試行錯誤した。	C	主体性の育成を目指し，生徒の自律した活動に向け，以下に取り組む。 ４月（１学期）：校則・学校生活のルール等の確認，高校１年生自転車通学者への注意喚起 ２学期：校則・学校生活のルールの遵守指導
課外活動	生徒会活動の復活	コロナ禍で途絶えた各種行事の復活を試みるために，生徒会執行部の活動の活性化を図った。 外部団体主催のイベントへの参加を積極的に行った。	B	生徒会活動を見直すため，以下に取り組む。 コース制への移行に伴い，生徒会活動や行事の見直しを行う。 生徒会研修が形骸化してしまっているので，生徒会執行部に責任を持たせ，生徒会活動の活性化を図る。
	委員会活動の充実	週番活動などの委員会活動が停滞状態であった。 生徒会執行部では，ＨＰを作成・活用するなど，情報発信を活性化させ，生徒からの自発的な活動を導き出そうとした。	B	委員会活動の充実を図るため，以下に取り組む。 生徒会役員研修が形骸化しており，各委員会の活動予定の報告会になっている。その状況を打破するために，生徒会執行部に責任を持たせ，生徒会活動をより活性化するために，日々の週番活動の徹底に加え，各委員会が積極的に独自の取組みチャレンジできるよう環境整備に努める。
	部活動の充実	文化部の活性を図るため，地域の団体からのイベントへの参加要請等を積極的に受けた。 運動部の活性を図るため，練習試合等の場を設けるために積極的な会場提供を行った。	A	部活動の更なる充実を図るため，以下に取り組む。 特別強化指定部（野球，陸上競技）のみならず，強化部になっている部活動の更なる活性化を図り，部委員の交流機会を設け，各部の取組を共有することにより，ブロック大会への出場する部活動を増やす。 文化部に関しては，各種発表会を充実させ，外部発信する機会を増やす。
進路指導	日本大学への進学者数増加に向けた取組	日本大学説明会を以下のとおり実施した。 ６月：日本大学説明会（全学年及び保護者対象）	A	引き続き学部説明会を充実させる。 日本大学への進学率 65％を目指す。 学部相談会や個別相談会の案内など，保護者に周知するために Classi などの情報共有ルールを有効的に活用していく。また各地区の保護者会にできる限り

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
		７月：日本大学個別相談会（３年及び保護者対象） 12 月：日本大学個別相談会（１・２年及び保護者対象） 高大連携について以下のとおり取り組んだ。 ５月：日本大学先端研究講座（１・２年アカデミックコース対象）※国際関係学部 ２月：日本大学先端研究講座（１・２年アカデミックコース対象）※歯学部 ３月：日本大学模擬授業（2 年対象）※文理学部等		進路指導部の教員が出席するように配慮する。 入試方法が年々複雑になってきているため，受験区分・方式について情報を共有するような機会を充実させ（特に３年生を担任する教員を中心に），担任によって進路指導に差異がないように配慮していく。
	医療保健系進学者対象の取組	医療保健系進学講座を以下のとおり開講した。 外部講師を招き，医療保健系への進学を目指す生徒を対象とした講座を５回ほど開催した。 ６月には本校の桜アリーナにて，総合的な探究の時間におけるキャリア教育の一環として，静岡県看護協会と協力し「看護の日・看護週間」記念事業イベントを開催した。	A	医療保健系進学講座の在り方について以下を検討する。 実施時期や依頼する講師参加希望調査の取り方を見直す。 参加者数を増やす工夫をする。
	他大学進学者に対する取組	他大学説明会を以下のとおり実施した。 ５月：他大学説明会（３年アカデミックコース対象）※国公立大学を中心に ７月：他大学説明会（２年アカデミックコース対象）※難関私立大学 高大連携の取組を以下のとおり実施した。 ９月：先端研究講座（１・２年アカデミックコース対象）※名古屋大学	B	令和６年度に引き続き，各大学の説明会を開催する。 アカデミックコースを中心に他大学進学希望者の進路実現に向けて，指導教員への対応を充実させる。 大学入学共通テストの分析など対策を行う。また年内入試の総合型選抜や学校推薦型選抜が増加している傾向から，データ分析を行い，情報提供する。 学校推薦型選抜（指定校制）の取扱いについて協議・検討していく。
保健衛生	**感染者数の増加防止に向けた取組**	生徒における感染症への罹患者数は令和５度より少なくなり，学級閉鎖の数も令和に入ってから最小数となった。 本校と県内外の感染者数を比較しても感染症対策の徹底が遵守されている結果であった。 風邪や感染性胃腸炎等についても保健だより等で注意を促し，消毒液の設置・手洗い・うがい・換気を励行し感染者数の増加防止に努めた。	A	保健委員を中心とした学校衛生に関する主体的な活動が滞っていたので，その再開を目指す。 生徒たち自身で学校衛生に関する課題を見つけ，その解決方法を検討し実行する機会を増やすことを検討する。 生徒の主体的な感染症対策を促す。 学校管理の一環として，各教室の 24 時間換気を継続的に実施する。

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
		コロナ禍における消毒液の大量購入や備蓄マスクの設置に加え，各教室へのサーキュレーターを設置したことが結果となって表れた。		
	教育相談部会の充実	特別支援コーディネーターの設置により，教育相談部会の在り方を検討した。 教育相談部会を各学期１回開催した。 各学年の連絡会を月に１回程度開催した。 カウンセラーによるカウンセリング可能日を週３回設けている。	B	教育相談部会をより充実させる。年間行事の中で日時設定することで，より綿密に担当者間での情報共有を図る。 特別支援コーディネーターを中心とした特別支援教育に関する委員会を設置し，特別支援を必要とする生徒ごとの支援計画を個々に検討する。 カウンセリング可能日を，引き続き週３回設ける。
	健康診断・歯科検診の実施	「児童生徒の健康診断マニュアル」の「検査項目及び実施学年」に基づき，法令健診・検診を実施することができた。 事後処置として，異常の見つかった生徒に受診を促した。	A	引き続き，各種法令健診・検診をつつがなく実施する。 学校医と連携することで，定期的な話合いの場を設け，学校行事を考慮した健診・検診日を設定することで，学習機会への影響を避け，心身共に健康で健全な教育環境づくりを目指す。
図書	読書推進の啓発的な取組	ブックフェアを以下のとおり開催した。 近隣書店と連携して，書籍選定の機会を設けた。 お気に入りの書籍のＰＯＰを作成した。 読書イベントを以下のとおり実施した。 後期図書委員企画の読書スタンプラリーを実施した。 スタンプをためた生徒にオリジナルの栞をプレゼントした。 いずれの企画も，図書好きの生徒たちには好評を博した。	A	図書室の利用者数を増加させるため，読書啓発活動を積極的に展開する。 図書室内のディスプレイを工夫する。 読書イベントの企画を再考する。
	新聞活用の取組	図書費で購入している各クラスの新聞の活用状況が，停滞した。 図書委員会で，週番活動としてクラスへ新聞配布をしているが，図書委員の意識が上がっていなかった。	C	クラス配布新聞を活用する。
	芸術鑑賞会の実施	令和６年度は，文楽を鑑賞し，古典芸能に触れる良い機会となった。	A	情操教育の充実を図り，様々な形態の芸術に触れる機会を模索する。
広報	学校説明会の充実	説明会の回数を令和５年度より高校６回，中学校２回増やした。 開催日時を参加者のニーズに沿って工夫をした。 説明内容を多岐にわたる内容とし，多方面に興味関心をひくように心掛けた。	A	入学者数を増やすために，入試広報の機会を充実させる。 令和６年度に引き続き，十分な学校説明会の機会を設ける。 説明会の運営方法に関して，人員配置に課題が残ったので，開催時期や時間，学校行事を考慮した運営を目指す。

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
	積極的な外部への発信	ＳＮＳの活用を積極的に行った。 学校公式の Instagram，グローバル留学コース公式の Instagram，Facebook，X，Threads，Yellz など様々な媒体から，日々の学校生活を発信することで，入試広報の活性化につなげた。	A	ＳＮＳの活用を更に活性化して，多くのフォロワーを獲得することで，人気校へのイメージアップを図る。 更新の頻度を上げ，日常の学校生活をアップすることにより，より身近な学校としての印象を持ってもらう。 担当者数を増やすことで，より多くの活動をアップすることを心掛ける。
	広報誌の活用	「日本大学広報」や「日本大学進学ガイド」を配布して，大学付属高校のメリットをアピールした。	A	大学との連携を強調して，スケールメリットを存分に発信する。 本校の入試広報の一環として，大学への接続を強調する。
管理運営	**入試方法の改訂に向けた取組**	入試方法の多様化への研究と市場調査とのバランスを図った。	B	入試方法の多様化への方向性を探る。 受験生の多様な能力を把握する方法を研究する。
	教員研修の充実	教員研修として以下を実施した。 「危機管理を踏まえたスクールマネジメント」に関して（講演） 自動採点使用法講習会（講習） ロイロノートスクール授業改善講習（ワークショップ）	B	年間行事内において，計画的に教員研修を開催し，様々なテーマで教員の研さんの場となる研修を設定する。
	業務改善に向けたＤＸ	各種刊行物の見直しや統合，廃止を行った。 クラウド活用による資料等の共有を促進した。 連絡手段をオンライン化した。	A	令和７年度に Box へ移行するため，有効な活用方法の検討を行う。 授業でのＩＣＴ活用にとどまらず，教員業務の中でのＤＸを促進する。

〔令和６年度の自己点検・評価結果概要〕

令和６年度は，コース制を導入して完成年度を迎えた。今まで学年単位での学年進行が強い学校の風土の中で，横のつながりから，縦のつながりへの移行は，教員も戸惑いながらの３年間であった。同時に生徒会指導部からもあるようにコロナ禍の影響がいまだに教育活動の多くの場面で見受けられる。教育活動全般に不安定な状態の中での進行が続いている。

また，教員の働き方改革の影響も小さいとはいえない。教育活動のＤＸの推進を図っているが，過渡期であり，業務の合理化まで至らないのが現状ではないかと感じる。しかし，これも一過性の課題であり，継続的な取組により，業務軽減に対する見通しは明るくなるように感じている。

令和６年度を総括すると，確実に社会が変わり，教育界も同様に大きな変革期を迎えていることを感じる一年であった。

〔令和７年度の重点目標〕

令和６年度は，募集活動である一定の成果が見られた一年であった。入学者数が過去最少を記録し，学校運営面でもかなり苦戦を強いられる状況の中ではあったが，入試広報に工夫が見られたため，令和７年度入学者の定員確保につながる予定である。この好転しつつある状況に，更に拍車がかかるよう教育の活性化を止めないエネルギーが必要となる。実際は少子化の影響が大きい中ではあるが，学校現場にできる生徒の魅力を最大限に引き出すことによって，学校の付加価値を上げて，元気な学校づくりを目標としていきたい。

また，令和８年度に教育課程の見直しを図るため，カリキュラムの全般的な見直しを図ることによって，より活発な教育活動を導き出せる環境づくりに取り組むことを掲げていきたい。そのために，教員研修の充実を図り，生徒の主体的な活動を促す教育機会の構築を目指していく。更には，キャリア形成のきっかけを設けられるような進路指導により，日本大学進学者数を増やすことに努めていく。

以　　上